

楷

岡山大学附属図書館報

OKAYAMA UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN

NO. 9

1989
OCTOBER

岡大図書館の機能充実を目指して

—館長就任にあたって—

定 兼 範 明

佐藤前館長の後を受けて、5月1日に附属図書館長を拝命してから4カ月が経過しました。情報化、国際化の時代を迎え、図書館業務が大きく変貌しつつあることは耳にしておりましたが、研究分野の性格もあり、旧態依然とした図書館利用に終始し満足していた私にとって、その変貌は目を見張るものでした。部・課長諸氏の懇切なご教示のもとに、素人には乱用とも思える各種の略号や片仮名用語に悩まされつつ、図書館の現状と課題についての学習が進むにつれて、緊急に解決を迫られている課題の山積に驚き、果たしてこの重職を全うできるか不安になりました。

しかし、他面において、部・課長を始めとする有能な図書館員の方々が、人的・施設的・予算的に劣悪な条件にもかかわらず、21世紀に向けての新しい図書館の創造に情熱を燃やししながら、その業務を黙々と効果的に遂行されている姿に接し、これらの人々に支えら

れるのであれば、菲才の私にも問題解決のために何らかの貢献ができるのではないかと勇気づけられました。

図書館は学術情報のセンターとしてその大学の顔とも心臓とも言われており、その充実度は研究・教育の水準を左右します。

次に、図書館充実のために現在取り組んでいる課題の一端に触れ、その解決のために、全学の教職員、学生の皆様のご理解と積極的なご協力をお願いいたします。

(1) 中央図書館は、昭和46年の増築時には延べ面積が7,413㎡で、面積では西日本一を誇る大学図書館でしたが、その後の急速な大学の発展にもかかわらず施設整備が遅れ、現在では必要面積の充足率が54%にまで低下しております。このため、書庫は満杯、配架できぬ図書資料約2万冊が箱詰めのまま倉庫に眠るなど、学習・研究・保存の各図書館機能の



低下はもはや弥縫策ではいかんともし難い状況にまで追い込まれています。幸いにも、佐藤前館長のもとで、情報化、ニューメディアの発達、国際化、思考・創造の場、業務のシステム化などの新しい視点に立ち、21世紀をも展望した「新中央図書館構想マスタープラン」、および、この構想実現の第1期として約6,300㎡の増築案も作成されています。

今後は、残された未検討の部分や各部局からの要望事項等について、「施設設定委員会津島北キャンパス整備計画検討専門委員会」、「新中央図書館建設企画委員会」、「図書館運営委員会」等で十分ご検討を願い、平成3年度概算要求では是非増築を実現していただきたいと思っています。

(2) 学術審議会学術情報部会の「学術情報システムの整備」に関する中間報告（平成元年7月）では、緊急性を有する当面の課題として、4項目が挙げられています。このうち「学術情報ネットワークの整備」については、学術情報センターを中心に現在22ノード大学間が高速デジタル回線で接続されていますが、中央図書館も昭和62年度に導入された専用電算機 ACOS システム430/60が接続を完了しています。また、「大学図書館間複写サービスシステムの確立」も昭和63年に高速FAX (G 4) を設置、ノード大学としての役割を担っています。

したがって、「キャンパス情報ネットワーク (学内 LAN) の整備」と「電子図書館システムの開発・導入」が今後の課題となりますが、本年度はこのうち特に学内 LAN による学内学術情報の流通体制の整備に積極的に協力することにしています。既に昭和59年に、外国雑誌データベース「PEACH」、昭和63年には、岡山藩人物情報データベース「諸識交替」を作成、総合情報処理センターのご協力により、各研究室等の端末機器からの検索が可能になっています。現在は、総合情報処理

センターのご指導のもとに、平成元年度購入図書 OPAC (オンライン閲覧用目録) の構築と、OPAC 検索システムの開発に努めております。これにより図書情報の検索は、従来のカード体目録ではなく端末機器からのオンライン検索に変わります。

私のような電算機に弱い者は不安を感じますが、図書館員が十分なインストラクションを行いますし、また、「ライブラリー・リフレッシュ (附属図書館新電化システム・ニュースレター)」を発刊し、利用者の皆さんの利便に供しますので、ご了承のほどお願いいたします。

(3) 本学図書館の学生利用率は全国的に見て高水準を維持しています。しかし、図書整備の財源である「図書購入費」は、学生定員増や書価の値上がりにもかかわらず、昭和57年度以降増額されていない上に、全学の振り替え経費は図書館の運営経費の恒常的不足を補うに留まり、学習図書の購入は思うに任せぬ実情にあります。このため基本的辞書類などの参考図書をはじめとして、学習図書の不足は深刻になっています。

これを打開する方策を検討するため、現在他大学の学習図書購入の実態調査を行っております。この調査結果を参考にして「学習図書整備計画」を立案し、学習図書としての機能の充実を図り、学生の皆さんのご期待に応えたいと思っています。昭和52年度以来関係部局から毎年約300万円の「学生用図書整備費」のご援助を頂いておりますが、なお一層のご理解を切にお願いいたします。

(4) このほか図書館の今後の課題については『岡山大学附属図書館概要』(1989) 5頁に記載しておりますので、積極的なご理解とご支援をお願いいたします。

(さだかね・のりあき 附属図書館長)



新中央図書館

マスタープランの概要

岡山大学新中央図書館構想マスタープラン案が、今年の3月開催された新中央図書館建設企画委員会で承認された。そこで、多くのかたがたのご理解をいただき、あわせて新構想のマスタープラン実現に向かっての今後のご協力をお願いしつつ、ここでその概要について紹介することとしたい。

1 中央図書館新営への経緯

附属図書館では数年前から、教官や学生、蔵書等の増加に対応するため、増築計画、改築計画を立て、施設概算要求事項として検討を重ね、要求を行ってきたが、具体化までには至らなかった。しかし、昭和61年7月、学長を委員長とする岡山大学新中央図書館建設企画委員会が組織され、これまで検討されてきた図書館増築計画を全面的に見直すこととなった。

そして、情報化時代にふさわしい本学中央図書館の今後のあり方について審議検討した結果、新中央図書館は、①図書・雑誌等の収集・整理・提供の充実のみでなく、サービス機能を拡充し、②高度情報化社会、国際化及び生涯学習化等に伴う利用者の新しいニーズに対応できる図書館を作るべきである、③そのためには、現有施設の増築では不十分であり、④新構想（21世紀へ向けての情報化、ニューメディアの発達、国際化、思考創造の場、業務システム化への対応）のもとに新中央図書館を建設すべきである、との結論に達した。

この結論を受けて、図書館内にワーキンググループ、建築プロジェクトチームがつけられ、データの収集・整理及び事務局施設部との打ち合わせを重ねながら立案作業を行い、

建設企画委員会等関係委員会に原案の提案を行ってきた。

2 なぜマスタープランか

新中央図書館建設の当初の案は現中央図書館の建物を取り壊して、その跡地に新しい建物を建てることであった。しかし、その後詳細について検討してみた結果、この案は現有施設の経年や耐久度から見て、取り壊しが可能かどうか、建設期間中の図書館の居場所をどうするか等を考えると現実的ではないことが明らかになった。そこで、現有地に建物を新営するための方法が問題とされ、マスタープラン案となったものである。マスタープラン案は、これまでの議論を踏まえ、新中央図書館が現中央図書館の在る場所に建てられた時の完成図を描き、その図に基づいて工期を2～3期に分け、時間をかけて建てかえていくとするもので、ビルド・アンド・スクラップ方式による新営である。

3 8つの基本方針

新中央図書館は、次の8つの基本方針のもとに構想されている。

- (1) 本学の教育・研究活動の支援をする基本施設と位置づけ、大学図書館の4つの基本機能（学習、研究、保存、総合）を21世紀への対応を推進しつつ整備充実する。
- (2) 学術情報・資料センターとしての機能を持たせる。
- (3) 学術情報ネットワークに参画し、学術情報流通体制の改善・整備に寄与する。
- (4) ニューメディアによる学術情報の積極的収集、提供及び利用の促進を図る。

- (5) 学術情報の収集・提供の面での、国際化に積極的に対応する。
- (6) 池田家文庫等、本学特有の蔵書の保存を図るとともに、これの効果的利用手段を開発し、学術の発展に寄与する。
- (7) 電算化の促進により、業務の効率化と迅速・的確な情報サービスの向上を図る。
- (8) 利用しやすく魅力ある建物と、自然を生

かした図書館周辺の環境を整備し、利用者によとりある思考・創造の場を提供する。

4 6つの機能

また、備えるべき機能は、学習、研究、保存、総合、学術情報・資料センター、電子の6つの図書館機能とされた。これを表にまとめると、次のとおりである。

新中央図書館の機能

機能	具体的な対応
学習図書館	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習用図書、教養図書、基本的名著、参考図書の充実 ○ AV資料・機器の整備充実 ○ 利用指導、目録・書誌の検索指導、参考質問の回答、図説・機器等による利用案内整備 ○ 複写サービス
研究図書館	<ul style="list-style-type: none"> ○ 辞典・書誌・索引等参考図書の整備充実 ○ 文献情報の所在案内、検索、提供 ○ 高額図書・学術雑誌の整備充実、及び全学的共同利用の促進 ○ マイクロ関係設備の充実・複写サービス ○ 自由な入庫検索、休館時・夜間時利用のシステム化
保存図書館	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全学の低頻度利用資料の集約的収納保存 ○ バックナンバーの集約保存 ○ 古文書等特殊コレクションの収納保管
総合図書館	<ul style="list-style-type: none"> ○ 図書館活動の総合的管理及び連絡調整機能強化 ○ 最適蔵書構成の維持 ○ 図書館に関する調査研究及び職員研修の充実 ○ オンライン総合目録の整備 ○ 図書館の情報処理システムの開発及び維持 ○ 相互協力網の形成・促進
学術情報・資料センター	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域の学術情報・資料センターとしての機能発揮 ○ 学外研究者への利用公開促進 ○ 学術情報資料の展覧、講習会等の開催
電子図書館	<ul style="list-style-type: none"> ○ コンピュータによる学術情報の入手・提供サービス ○ ニュースメディアの整備充実及び利用サービスのシステム化 ○ 各種情報システムの利用窓口機能の整備 ○ 本学所蔵資料及び書誌情報等の電子化

5 構成する要素

新中央図書館を構成する要素は、次ページの表のとおりである。2の項においてふれたように、この表に記載されている室またはスペース、主要内容は、新中央図書館が完成した時点でのものである。現実問題として、現在の建物を使用しつつ、どのように具体化するかは、津島キャンパスの全体計画、道路計画、図書館の敷地、現有の図書館建物と新中央図書館建物とのつながり方、階高等々、利用面・管理面の双方から、今後とも十分な検討がなされて建設されるべきものである。

6 建物の規模

マスタープランに基づく現時点での規模は次のとおりである。なお、面積、座席、冊数は実施の段階で、構造上、プランニング上から変更が生じることがあるのは止むを得ないものとされている。

構成部分	面積 m ²	座席数 席	収容可能冊数 冊
利用関係	8,060	1,692	371,000
収蔵関係	4,040	20	1,027,200
業務関係	1,900		

(矢野 光雄

やの・てるお 図書館事務部長)

新中央図書館の構成要素

構成部分	室またはスペース	面積	主 要 内 容	
人口・玄関	玄関・ロビー	320㎡	標示板 ブックポスト 傘立 案内表示板 掲示板 電話 当日新聞台 展示 ブックディテクション	
	ホール		ホール	
利	目録・参考業務	725㎡	カード目録 検索台 OPAC 検索用端末機 参考業務デスク 情報検索用端末機 複写機 参考図書群 参考図書閲覧席	
用	閱 覧	4,379㎡	貸出カウンター	一般閲覧席
	一般開架閲覧		主題別開架図書群 (指定図書を含む)	
	研究開架閲覧		全学共用研究図書群 (大型コレクション、高額図書を含む)	
	新聞 雑誌 視聴覚資料 ニューメディア資料		新聞 (バックナンバーは別置する場合があります) 雑誌群 マイクロ・視聴覚資料群 ニューメディア資料群	
	貴重図書閲覧 特殊資料		同上視聴覚機器・ブース 特殊コレクション群 地図 その他特殊資料群	
関	研究者閲覧席			
	研究個室			
そ の 他	ブラウジング	360㎡	軽読書資料群	
	グループ研究 セミナー タイプライター ワープロ 端末機 複写機 休息ラウンジ	582㎡	グループ学習室 ゼミ室 タイプ室 ワープロ室 端末室 複写コーナー ラウンジ 喫煙室 (適宜分散する)	
係	多目的ホール 便所 廊下 階段 エレベーター	1,694㎡	多目的ホール 共通部分	
	取 蔵 関 係	4,040㎡	エレベーター リフト 搬送機	
書 庫	一般書庫 保存書庫 貴重図書書庫 視聴覚資料庫 その他特殊資料庫		書庫内キャレル	
	情報サービス	370㎡	運用事務 書架目録スペース 配本スペース 参考調査 情報検索業務 相互協力事務 雑誌受付整理	
業	視聴覚資料製作 製本準備	80㎡	製作準備室 製本準備室	
	情報管理	490㎡	受入れ書架 運書室 荷解室 整理書架 作業テーブル 事務用目録 作業室 作業室 機械室	
関	総 務	740㎡	館長室 部長室 応接室 宿直室 事務室 会議室 研修室 印刷室 物品庫 文書庫	
	職員用諸室	220㎡	スタッフルラウンジ 更衣 シャワー 湯沸かし 便所	
係	施設維持		作業員 倉庫 機械・電気 ボイラー 受水槽	
	屋 外 駐 車 ス ペ ース		標示板 照明 舗装 植栽	

特集/ LAN OPAC ニューメディア

このたび公表された学術審議会学術情報部会の中間報告は、学術情報システムの整備に関する当面の課題として、学術情報ネットワーク、キャンパス情報ネットワーク（学内LAN）、複写サービスシステム、電子図書館システムの4つを柱としています。大学及び大学図書館にとっては、みな重要課題です。ところで、岡大における学術情報システムはどうか、また今後の方向はどうか、このあたりを理解していただくため、学内LAN及び図書館OPACの紹介、来るべきニューメディアの様相等について、ささやかな特集を組みました。

学内LANの現状と今後の課題

川 端 親 雄

現在、構築されている岡山大学総合情報処理センターのコンピュータシステムの基本的な概念は、

- (1) 学術研究の超高速演算処理
- (2) 学生の情報処理教育の支援強化
- (3) 学術情報のデータベース化促進

である。コンピュータシステムは、「学術研究」と「高等教育」の総合情報処理を目的とする、集中的分散型の学内LAN（キャンパス内ローカル・エリア・ネットワーク）により統合されている。

具体的には、津島キャンパスにある総合情報処理センターにコンピュータの本体を置き、津島キャンパス内の各部局の端末系から多量の情報伝送が可能で、その信頼性が高い光通信ケーブルでセンターの本体と接続している。また、鹿田キャンパス内の各部局の端末系は高速デジタル回線を経由して、津島キャンパスにあるセンターの本体と接続している。さらに、津島・鹿田キャンパス外の遠隔地にある岡山大学附属の研究所や教育研究施設は、NTTの特定通信回線や公衆通信回線でオンライン化されている。

一方、総合情報処理センターは、わが国における大学間ネットワークにも加入し、上記

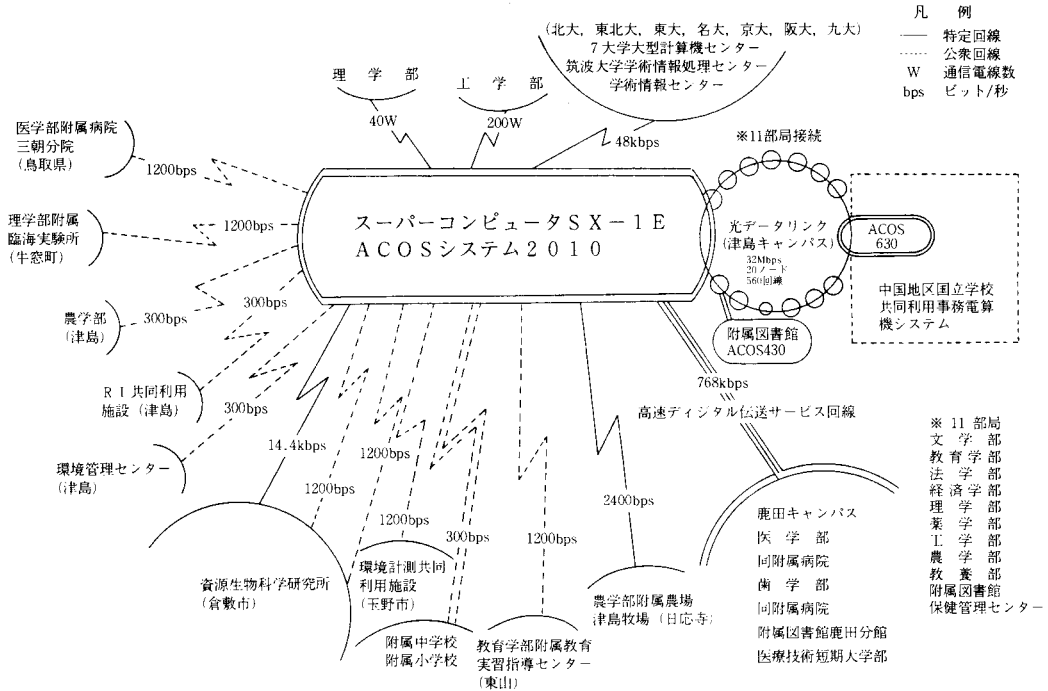
端末系から、全国共同利用の大型計算機センターや文部省学術情報センターが利用できる。

現在、総合情報処理センターに導入されているホストコンピュータシステムは、日本電気製の世界最大、最高速級の超大型汎用コンピュータ「ACOSシステム2010」で、主記憶容量128MB、演算速度47MIPSである。また、ベクトルプロセッサ（スーパーコンピュータ：主記憶容量AP128MB、CP32MB、演算速度285MFLOPS）としては、同じく日本電気製SX-1Eが装備されている。

岡山大学事務局経理部情報処理課は、中国地方国立学校共同利用事務センター校として日本電気製の大型汎用コンピュータACOSシステム630モデル10、また、岡山大学中央図書館は、同じく日本電気製の中型汎用コンピュータACOSシステム430モデル60を導入している。各部局事務室の事務専用端末や、図書館本館・分館の各端末から、学内LAN経由で、それぞれのホストコンピュータを使用できる。

以下、岡山大学の総合情報処理システムのネットワークを中心に、学内レイアウトを図示する。

岡山大学総合情報処理センターオンライン接続状況



現在、総合情報処理センターには、中央図書館の外国雑誌と池田家文庫の岡山藩政史料（諸職交替）がデータベース（DATA 710）化され、さらに今秋から OPAC（オンライン閲覧目録）の導入も計画されている。

数年前から東京に発足した文部省学術情報センターは、ほぼ、管理体制が確立し、地方大学の図書館からの情報収集システムは完成したと考えられる。しかし、岡山大学に限らず、各大学の図書館は実際に欧米先進諸国の図書館サービスと比較した場合、かなりの部分で遅れていると言っても過言ではあるまい。

最近、学術研究の高度情報化や国際化が進み、大学図書館は教育、学生にとって大変重要な存在となった。海外で豊富な研究活動の経験を持つ教官をはじめ、図書館利用者の皆さんは、「現状」に失望したり、あきらめず、どしどし建設的な意見を出し、21世紀を目指した、自慢のできる新しい岡山大学の図書館づくりに協力する必要がある。

今後の学内 LAN の問題は、現行の大学間

や学術情報センターの N1 ネットワークの積極的活用を進める必要がある。岡山大学の研究・教育活動は急速に国際化し、それに対応するため国際ネットワークへの加入が急務である。また、学内に散在するパソコン、FAX、ワープロなど OA 情報機器を電話回線によって統合し、学内 LAN に接続できるデジタル交換機などの導入が期待される。

さらに、各部署・学科等ですでに独自に導入した、あるいは近い将来導入されるであろうコンピュータシステムの小さい LAN と、既存の大規模な学内 LAN との融合と整備が考えられる。学術研究のデータ、図書・雑誌情報、国内・国際間のメールや、ファイルなどの送受信についても、円滑に運用する必要がある。このために、「学内ネットワーク」の高度利用に関する全学レベルの検討が、岡山大学においても、早急になされなければならない。

（かわばた・ちかお

総合情報処理センター 研究開発室長）

岡大OPAC

田村潤二

1 はじめに

図書館ではこのたび専用電子計算機による新しいシステムの試行的運用を終え、一部本番稼働を開始しました。このシステムは、本学の学術情報流通改善の一端を担うべく、図書館が新しい情報システムとして再生する道のりの第一歩を記すものとなるはずです。

以下にその概要をお知らせします。

2 新システムの構成

〈基本構成〉

専用電子計算機は日本電気社製の汎用中型機である ACOS システム430のモデル60です。主記憶装置の容量は8MB、外部記憶装置として2.9GBの磁気ディスク装置を備え、オペレーティングシステムとしてACOS-4が搭載されています。また、業務用の端末は現在、本館・分館あわせて19台が稼働しています。

〈図書館業務ソフトウェア〉

以上のような基本構成の上に、図書館業務を処理するためのアプリケーションソフトウェアとして、同じ日本電気社の中規模大学図書館向けソフトウェアパッケージであるLICSU-4が搭載されています。

LICSU-4は①図書管理(受入・支払等)、②目録管理(目録作成)、③雑誌管理(契約・支払・目録作成等)、④閲覧管理(貸出・返却等)、⑤検索管理(オンライン検索)の5つのサブシステムからなっています。

3 新システムのねらい

新システムは図書館の主要業務全体を遂行できるシステムとなっていますが、運用上のウエートを目録情報(どのような図書資料が

どこにあるかを示す)の作成・流通過程の自動化というところに置き、受入・支払や貸出・返却はこれをサポートするものとして位置づけています。

目録情報作成・流通過程の自動化とは、

- (1) 目録情報作成のオンライン化
- (2) 目録情報データベース形成の自動化
- (3) オンライン検索システムの開発

ということですが、これをやさしく言うと、マニュアルによるカード体目録作成作業を電算処理による磁気媒体のデータベース形成に替え、カード体目録とくらべてはるかに便利なオンライン検索システムを作り上げることになります。

このような運用上のウエートの置き方は、図書館を図書資料の収集・管理機関としてだけでなく、情報の生成及びその流通の側面をも含めた総体としての情報システムとしてとらえる考え方によっています。

4 OPACの構築

〈OPACの意義〉

以上のように新システムは、つまるところは目録情報のオンライン検索システムを実現することをねらいとしているわけですが、図書館ではこれを「OPAC」と呼んでいます。「On-line Public Access Catalog」の頭字語で、「オーパック」と発音し、日本語では「オンライン閲覧目録」と訳しています。

要は、データベースを端末の操作によって検索するという、電子計算機の能力をフルに活用した利用者のための目録情報検索システムですが、これまでのカード体目録に比べて以下の点で優れています。

利用面からは、

- (1) アクセスポイント（検索のてがかり）を豊富に用意することができる。
- (2) 検索のスピードが早く、網羅的である。
- (3) カード目録の複雑な配列規則を知らなくても検索できる。また、配列の乱れに悩まされることがない。
- (4) 端末さえあれば学内 LAN を通じて、学内各所から検索できる。

また、図書館の管理・運営面からは、

- (5) カードを配列するという作業が不用となり、省力化効果大きい。
- (6) カードケースの設置スペースが不要である。

〈岡山大学の OPAC〉

現在、新システムの中核には平成元年度受入れ図書目録情報データベースが形成されつつあります。昨年度試行的に作成したものも含めて、8月末ですでに1万数千件の規模に成長しています。

また、検索システムとしては先に述べた LICSU-4 の検索管理サブシステムが稼働しており、一応の OPAC としての機能を実現しています。その詳細については別の機会に紹介されると思いますが、「一応の」と限定をつけたのは、現在、図書館ではもっと検索性能の優れた本格的な OPAC を総合情報処理センターのご協力のもとに開発する計画を立て、すでに実作業に取り掛かっているからです。

この計画は、学内 LAN を通じた全学的なサービスの実現に向けて、図書館の新システム上で作成される目録情報データを総合情報処理センターのシステム上に移植し、同システムの情報検索ソフトウェアによって本格的な OPAC として開発しようというものです。

5 ネットワークの展開

〈学術情報システム〉

最後に、大学図書館の電算化において目録情報作成及びデータベース形成の自動化ということが可能となってきた最近の背景につい

て、少しだけ触れておきます。その背景とは、いうまでもなく電子計算機の各種ハードウェアやソフトウェアの急速な進歩ということがあります。それとともに、「学術情報システム」という通信技術で結ばれた全国的な電子計算機ネットワークが実現したことが大きな要因です。

学術情報システムの中核には「学術情報センター」があり、各種の学術情報流通の促進に関わる事業を国の施策として展開していますが、その一つに、大学図書館のためのオンライン図書館ネットワーク（以下、ネットワーク）があります。

〈ネットワークの利用〉

このネットワークは参加館の個々の電算化をサポートする機能をもっています。

参加館は、ネットワークの提供する目録作成システムをそのまま自館の目録作成システムとして利用し、また、標準的な書誌情報の一大供給源である各種書誌情報データベースから、オンライン取り込み等の手段によって、参加館自身のデータベース形成の自動化に利用できます。

〈ネットワークへの貢献〉

このように、個々の参加館はネットワークを、電算化のためのインフラストラクチャーとして利用しますが、同時にネットワークに対する貢献も行うという相互性の関係にあります。

ネットワークの中心にある全国目録情報データベース（全国総合目録データベース）が各参加館の貢献の結果です。このデータベースは、各参加館がネットワークを利用すると同時に、その所蔵情報が追加される仕組みとなっていて、現在では100万件を超える図書や雑誌について、400万件に近い所蔵データが蓄積され（平成元年7月現在）、わが国における学術情報流通の重要な基盤として成長を続けています。

（たむら・じゅんじ 図書館情報サービス課長）

ニューメディアと図書館

垂水 共之

図書館の利用形態は、教官、院生、学生によって異なるし、文系、理系等の専門分野によっても異なるであろう。ここでは、主に理系の研究者の使い方とニューメディアについて述べてみよう。

理系の研究者にとって専門の論文誌のタイトル数、バックナンバーの揃い方が最大の関心であろう。もちろん専門によってはバックナンバーがあまり意味を持たないような新しい研究が湯水のごとく発表される分野もあるし、数学のように100年前のバックが欲しくなるような枯れた分野もある。

新着雑誌については目次から自分に関係のありそうな論文を見つけ、該当するページを開いて、要約等を読んだり、内容をペラペラめくってみながら、読むべきか、読まざるべきかを判断するというのが多くの研究者が行っている方法であろう。忙しさにまぎれてめくっていなかった雑誌を取り出してめくるのも1~2年前までがいいところである。

それ以前の旧着雑誌を取り出すのは2次情報誌や文献検索、論文のレファレンス等から目的の論文が確定されている時であろう。このとき要求されることは目的の論文への迅速な接近である。近年の図書館の機械化、近代化によって図書、雑誌の所在情報は完備されてきており、どこに目的の雑誌があるかは研究室からでも検索できるようになってきた。

次の目標は所在情報から目的の論文を迅速に取りよせることである。一部の国内外の図書館ではFAXによるコピーサービスも始まっており、人手を介せば速くにある論文も即

座に手に入れることができる。

この夏、あるフランス語の教官から聞いた話では、パリの図書館である文献を複写しようとしたとき、普通の書籍、雑誌では自分でコピー機を使って複写すれば済むものを、マイクロフィッシュになっていたため、図書館に複写を依頼しなければならず、手に入れるのに数日間かかるとのことであった。「マイクロフィッシュ」という今となっては「旧メディア」に属するメディアの問題であろうか。それとも「マイクロフィッシュリーダー（読み取り機）」にハードコピー出力機能が無かったという機械の問題であろうか。たしかに、マイクロフィッシュの1コマを元のA4なり、B5なりに拡大出力するためには高精度のレンズが必要であり、安価な読み取り機に付加するわけにはいかない。

「マイクロフィッシュ（フィルム）」に変わるメディアとして近年使われているのが「光ディスク」を使った「画像ファイル」である。「光ディスク」の大きさには種々あるが直径30cmの円盤にA4サイズで10万枚程度の白黒画像が保存でき、パソコンを使って検索した結果を画面、または用紙に出力してくれる。指定すれば、人手を介することなく遠隔地へFAX送信することも可能である。多くの科学技術論文では白黒で充分であり、年間1,000ページの論文誌が100誌、または100年分が1枚のディスクに置き換えられる。光ディスクへの記録を誰が行うかという問題はあるもののマイクロフィッシュを作るのと同じ手間のできることである。自動的にページをめくる機械さえできれば、雑誌をセットするだけで自動的に光ディスクへ記録されるよ

うになろう。

上の光ディスクがコピーのように「アナログ処理」を念頭に置いているのに対して、「CD-ROM」に代表されるのが「デジタル処理」による出版である。六法全書や各種辞典のように文字情報を中心とし、図、絵、グラフが少ない書籍でページ数の多いものがCD-ROM出版の中心である。1枚のCD-ROMには500 MB強（漢字で2億5,000万字、A4で10万ページ程度）が記録できる。光ディスクに比べて「マスタディスク」を作る費用はかさむものの、以後はLPレコードのようにプレスするだけで1枚CDができ、コピーを多量に作るほど安くなる。500 MBが大きすぎれば、いずれ8 cm CD版の大きさと150 MB程度があらわれるであろう。

文章がデジタル処理されたときのメリットは「全文検索」である。シェイクスピア全集での各単語の使用頻度の解析等のためにはデジタル化が必須である。論文検索でも本文までデジタル化されていればキーワードに無いようなものまで検索が可能になる。

このようにデジタル化したときのメリットには計り知れないものがあるものの、既存の書籍、論文を改めて入力することは不可能に近い。いずれ、高性能のOCR（文字認識装置）が開発され、現在のコピー感覚でデジタル化されるようになるまで待つことにしよう。大手の新聞や、大規模の辞典の編集では、人手の編集に限界がきて数年前からどんどんコンピュータ化され、デジタル化されている。これを編集しなおしたものが現在のCD-ROM出版の中心である。最初からCD-ROMを念頭に置いたと言うよりは、たまたまデジタル化されていたというべきであろうか。

研究論文に話を戻そう。学会発表の予稿集などは手書きで十分と思っていたものの、7

年前のある学会の予稿集で手書きの予稿が自分のもの1編だったことがあり、以後私も日本語ワープロを使って予稿を書くようになった。論文誌への投稿論文は昔のタイプライターから英文ワープロへ切り替わったのもこのころである。このように論文の本文（図、絵、グラフを除く）は投稿者からデジタルでもらえるような環境になってきた。問題の多かった数式の出力についても、最近「TeX」というソフトが世界の標準になってきている。

投稿者がデジタル化したものをわざわざアナログ化して印刷することもなかろうと、デジタルで投稿し、デジタルで配布する「エレクトリックジャーナル」の試みも始まっている。投稿からレフリーの審査、発表までオンラインで行うことにより受付から発表までのタイムラグをできるだけ短くすることができる。「オンライン・エレクトリックジャーナル」の場合、オンライン回線が使えない会員にはフロッピーディスクや磁気テープ等のオフライン配布も可能であり、計算機も使えない会員には用紙にプリントした「雑誌」形式で配布することもできる。このニューメディア「オンライン・エレクトリックジャーナル」を使うためには旧メディア「電話（通信）回線」の整備が重要である。ISDNや、衛星通信を含んだ国内、国外との回線整備を考える必要があろう。

学術雑誌のニューメディア化を中心に話を進めてきたが、週刊誌、文庫本に代表される一般の書籍はどんな形になるであろうか？ DATテープを使った4 mmビデオや、8 cm CDによる「携帯リーダー」、ICカードを使った文庫本サイズの電子手帳タイプなどが夢に浮かぶ。アシモフの「銀河帝国の興亡」（創元推理文庫）全3巻、1,078ページ、1.6 MBが1枚のICカードで発売されるのはいつであろうか。そのときは老眼鏡の代わりに大画面に表示させて寝ころんで読むことにしよう。

（たるみ・ともゆき 教養部教授）

統計で本学図書館をみる

「図書館概要 1989」から

このたび刊行した『岡山大学附属図書館概要』1989では、本学図書館の現状を明らかにするため、業務を多角的に数量化した統計に力点を置いています。特に、蔵書・職員・経費に関するデータは、最近5カ年（昭和59～63）のものに指数を付して動向を示し、利用サービスは最近2カ年（昭和62～63）のデー

タを挙げて、業務量の変化を読み取れるようにしています。文部省が毎年国・公・私立大学図書館を対象に実施する実態調査のデータによっているので、全国的なレベルでの比較が可能です。

そこで、62年度の『大学図書館実態調査結果報告』と照らし、本学図書館の特色と問題

職員数の不足

●国立大学図書館職員1人当たり

	学生数 人	蔵書数 冊	図書 受人数 冊
A	103	17,774	578
B	171	17,222	636
C	159	18,697	615
D	115		484
岡大	207	24,262	778

少ない図書館資料費

●国立大学学生1人当たり

	蔵書数 冊	図書 受人数 冊	図書館 資料費 千円
A	172	6	58.5
B	101	4	34
C	118	4	34
D	106	4	35
岡大	117	4	29

積極的な利用サービス

●国立大学図書館1館1日平均

	貸出 冊数 冊	レファレンス サービス 件	情報 検索 件	古文献 利用 件	文献 複写 枚	相互 協力 文献複写 件	協力 現物貸借 冊	
A	59	10	0.7		652	8	0.6	
B	129	13	1.2		388	11	0.3	
C	83	7	0.2		342	11	0.1	
D	85	4	0.4		191	6	0.2	
岡大	62	260	53	2.8	6	347	16	1.3
中央館	63	308	46	1.4	6	342	15	1.2

点を考えてみました。

まず、職員数の不足が問題です。職員1人当たりの学生数は、全国平均（A規模）の2倍、蔵書数・図書受入数は1.3倍です。その上に非常勤職員の比率は46%という高さです。

次に、学生1人当たりの図書館資料費は、全国平均（A規模）の半額に過ぎません。蔵書数も70%どまりです。

利用サービスは、夜間・休日開館の実施（A規模の全国平均実施率、夜間34%・休日3%）をはじめ、貸出、レファレンス、情報検索、古文献利用など、全国にひけをとらないサービスを提供していると思われませんが、

他大学への文献複写、現物貸借の依存の大きさが目立ちます。全国平均（A規模）に比べ、本学は逆に、文献複写依頼館、図書借受館で、63年度はさらに拡大の傾向にあります。文献複写の依頼先は、教官校費の場合、自然系は広大・山口大などの地域の大学、東工大・京大などの外国雑誌センター館（利用率25%）に依存し、人文・社会系は東大・京大などのいわゆる7大学に依存しています。

概要の「整備・充実計画」に掲げているように、蔵書の一層の充実対策が、今後の重要課題の一つといえるでしょう。

（館報編集委員会）

高い他大学への資料依存度—国立大図書館間相互協力—

● 1館平均文献複写件数

	国内		国外	
	受付	依頼	受付	依頼
A	1,447	753	1.4	28
B	1,375	1,826	0.5	42
C	1,752	1,280		21
D	494	1,261		10
岡大	62	1,747	3,868	253
中央館	63	1,276	3,939	338

● 1館平均現物貸借冊数

	国内		国外
	貸出	借受	借受
A	104	46	3
B	15	48	1
C	8	33	1
D	7	53	
岡大	62	99	236
中央館	63	55	257

● 岡大中央館文献複写依頼先（63）

順位	自然系		人文・社会系	
	教	官	教	官
	件		件	
1	広大	196	東大	248
2	*東工大	111	京大	111
3	阪大	87	*一橋大	98
4	山口大	84	広大	91
5	*京大	84	阪大	58
6	*阪大中之島	62	京大分館	56
	その他	519	その他	355
	計	1,143		1,017

*印 外国雑誌センター館

（備考）

国立大学規模別分類（62）

A	8 学部以上	15校
B	5～7 学部	14
C	2～4 学部	28
D	単科大学	38
	計	95

岡大はA

マスカット

『岡山大学附属図書館概要』1989年版 — 装い新たに刊行 —

このたび、『岡山大学附属図書館概要』の1989年版が出来上がりました。

この概要の刊行の意図は、本学図書館の現状を明らかにして、今後の整備・充実計画に資するとともに、最新の概況を関係諸機関等にPRすることにあります。

そこで、これまでの「読む概要」から、デザイン・内容とも一新し、「見る概要」に華麗に変身しました。

本文40頁、B5版、カラー印刷で、内容は沿革、組織機構、整備・充実計画、施設、設備、資料・職員・経費（統計）、利用サービス（統計・特色あるサービス）、図書館のシステム化、コレクション（藩政史料・地方史料・個人文庫・大型コレクション）、出版物、規程からなっています。

表紙・レイアウト・位置図の斬新なデザインは本学教育学部清水國夫教授にお願いしました。

桑山文庫の整理完了 — 資源生物科学研究所分館 —

旧農業生物研究所時代に収集された「桑山文庫」の整理が完了しました。

「桑山文庫」は、故桑山覚博士旧蔵の農業害虫関係文献集で、雑誌掲載論文の別刷を中心とした約9,000点にのぼるコレクションです。

桑山覚博士は明治30年（1897）生まれで、大正6年（1917）に東北帝大を卒業後、北海道農事試験場に勤務され、昭和34年（1959）に退官されるまで農業害虫関係の研究者とし

て活躍された方です。研究のかたわら関係資料の収集家としても有名でしたが、昭和56年に亡くられました。

昭和52年度に当時の農業生物研究所害虫学研究室の安江教授が、この桑山コレクションの学術的価値に着目、農業害虫研究にとって欠かせない資料として購入されたものです。

以来、本研究所分館では、時間をかけて慎重に整理を行ってきましたが、このたび「桑山文庫」として公開するはこびとなりました。目録カードから著者名等を手がかりとして検索できるようにしています。

なお、この資料は新館書庫4階に配架してあります。

学外者の文献複写料金改定

消費税法の施行に伴い、平成元年4月1日をもって岡山大学附属図書館文献複写規程の一部が改正され、学外者に対する文献複写料金が改訂されました。

例えば、電子複写方式による場合、これまで1枚につき45円であったものが50円になりました。

なお、学内者についてはこれまでどおりです。

ファクシミリによる文献複写開始

このたび文献複写業務用の高速ファクシミリ（G4）を導入し、これによるサービスを開始しました。

現在、他機関との文献複写は、郵送によっていますので、それなりの時間がかかっていますが、高速ファクシミリを利用すると大幅

に時間が短縮されます。

現在のところこのサービスを実施している機関はファクシミリネットワークに参加している北海道大学、東北大学、筑波大学、東京工業大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学（中之島）等に限られていますが、今後次第に拡大していくものと思われます。

なお、料金は1枚につき90円（複写料50円＋通信料40円）です。

詳細は参考調査係にお尋ねください。

フランス国立図書館貸出センター (BN-Centre de Prêt) クーポン券の利用開始

これまで中央館ではBLDSC（イギリス国立図書館貸出部門）発行のクーポン券を備え、同図書館に対する文献複写依頼に利用していただいていたのですが、このたびフランス国立図書館貸出センター発行のクーポン券も備えることにしました。同図書館へ文献複写を依頼する時にはこれを利用してください。

ただし、学内校費移算による場合のみ利用できます。

会議

◆ 国内

4.18～4.19 第37回中国四国地区大学図書館協議会
総会（当番館 広島大学）

協議事項

相互協力業務の改善について

- ・文献複写料金の送金方法
- ・レファレンス業務に必要な経費の負担
- ・ファクシミリによる相互協力業務の確立
- ・その他

4.19 第16回国立大学図書館協議会中国四国地区協
議会（当番館 広島大学）

5.29 国立大学附属図書館事務部課長会議
（於 東京医科歯科大学）

5.31 国立大学図書館協議会理事会

なお、このクーポン券は1枚につき1,165円になりますが、複写ページ数とクーポン券の枚数の関係は、下表のようになります。

複写ページ数	クーポン券枚数
1～10	1
11～20	2
21～50	3
51枚以上は 10ページごとにクーポン券1枚追加	

岡山大学附属図書館文献複写料金 徴収猶予取扱規程の制定

このたび標記の規程が制定され、公私立大学・短期大学、学校図書館、公立図書館、公益法人図書館等からの文献複写依頼に対し、料金の納付を待たずに複写物を前渡しすることが可能となりました。

これまでは料金が納付されなければ複写物を送付することができず、これらの機関との学術情報流通の隘路となっていました。

なお、この制度は申請のあった機関に対し料金徴収手続きを猶予する取扱いを適用するというものです。

（昭和63年度第3回）

6. 5 岡山県図書館協会定期総会

6.29～6.30 第36回国立大学図書館協議会総会
（当番館 弘前大学）

第1分科会

- ・外国人留学生のための資料整備について
- ・外国雑誌センター館における雑誌の収集およびサービスの提供について
- ・学生の情報検索サービス利用について
（私費利用の問題）
- ・事務用ファクシミリによる参考業務事務の改善について
- ・学術情報センターの電子メールの活用について
- ・コンピュータ、AV機器を利用した図書館施



設・設備の利用に係る情報提供の手段について

- ・ファックス（特にG4）を利用した複写サービスの充実について
- ・その他

第2分科会

- ・学術情報システムの書誌・所蔵データの遡及入力促進について
- ・図書館職員の公務員試験合格者の拡大について
- ・図書館資料購入費の安定的増額について
- ・大学図書館のニューメディアへの対応・促進について
- ・職員の確保と研修の充実について
- ・その他

◆ 学 内

- 4.25 第1回附属図書館運営委員会
- ・平成2年度概算要求事項について、その他
- 5.19 平成元年度図書資料（大型コレクション）収書計画に関する小委員会
- 6.20 第2回附属図書館運営委員会
- ・平成元年度学生用図書整備計画について
- 6.20 第1回総合情報処理センター長・附属図書館長

協議

- ・オンライン閲覧目録(OPAC)の構築について

- 6.21 第1回新電算化システム運用推進班総括班会議
- 7.4 第1回岡山大学附属図書館報編集委員会
- 7.6 池田家文庫等特殊文庫委員会
- ・平成元年度図書館特別業務経費（池田家文庫等特殊文庫整備費）による事業計画について、その他
- 7.13 第3回附属図書館運営委員会
- ・平成元年度学生用図書購入実施計画（案）について
 - ・福利厚生施設建設予定地に関する学生部からの申入れについて
- 7.18 第1回附属図書館資料選択委員会
- 7.24 第2回岡山大学附属図書館報編集委員会
- 7.27 第2回新電算化システム運用推進班総括班会議
- 8.30 第1回図書館データベースに関する総合情報処理センター・附属図書館実務打合せ会
- 9.6 第2回附属図書館資料選択委員会
- 9.8 第2回図書館データベースに関する総合情報処理センター・附属図書館実務打合せ会

研修

平成元年度大学図書館職員長期研修（7.24～8.11）

参加者 脇本敏郎

ライブラリアン・文科系の化学物質辞書セミナー

（7.26～7.27）参加者 宮 明治

平成元年度総合目録データベース実務研修

（9.1～9.28）参加者 古中秀子

編集委から

新館長の言葉にありますように、今年は岡大図書館にとって、リフレッシュ元年。本誌も変身しました。新しいタイトルデザインを本学清水國夫教授にお願いし、「LAN OPAC ニューメディア」を特集しました。そのほか、図書館及び図書館周辺の最新の動向をコンパクトにお知らせする企画

を試みました。いかがでしたでしょうか。

「マスカット」欄は、図書館の情報ファイルとして設けました。ご一瞥ください。

本誌にも魅力ある紙面づくりが期待されています。皆様のご意見、ご協力をお願いいたします。次号は、資料収集の諸問題の特集する予定です。

岡山大学附属図書館報「楷」 No.9 平成元年10月20日

発行人 矢野光雄 編集委員会 委員長 田村 委員 三樟、水田熙、中野、水田真、大元、清長、田中
岡山大学附属図書館発行 〒700 岡山市津島中3丁目1-1 電話0862-52-1111